

## ＜超高齢社会の絆＞ 遺骨の行方 上 自宅で長年保管の後、合祀墓に

少子高齢化で、残された家族らが遺骨をどうするかに悩むケースが増えている。お墓がなく家に長期間保管する例や、継承者がいないためお墓じまいする人も多い。多数の人の遺骨を一緒に埋葬する合祀（ごうし）墓（合同墓）も備えた北海道中央霊園（三笠市）の利用者の話を中心に、今回と29日の2回に分けて実例を紹介する。

同霊園の武田寛（ゆたか）理事長（55）はもともと、ホームセンター大手のホームマック（現DCMホームマック）で人事関係の仕事をしていた。理事長だった父親の死去後、同社を退職し、2013年春に現職に就いた。

お墓の継承者がいない悩みに応えるため、翌14年に造成したのが永代供養付き合祀墓「結（ゆい）の苑（その）」。費用は1体の遺骨で3万9千円。2千体の遺骨を埋葬できる規模で、当初は年間100体程度の利用で20年間もつと見込んでいたが、生前予約も含め利用は既に1200体。今後、増設することも検討中だ。



北海道中央霊園の合祀墓「結の苑」と理事長の武田さん。家に遺骨を長期間保管していた人の利用も多い

合祀墓の利用者で目立つのは、長期間自宅で遺骨を保管し続けていたケースだ。

空知地方の女性（82）は今月、夫の遺骨を納骨した。墓を建てたり納骨堂を買うお金もなく、自宅アパートに遺骨を18年置いたままだった。子どもは道外にいて音信不通。

足が不自由になり、アパートを退去して施設に入ることになったため、地元自治体に相談したところ同霊園を紹介された。女性は「自分も生前契約してこの墓に入りたいのですが、今はお金がなく将来が不安」と漏らす。

大阪市の女性（47）は苫小牧市に両親が住んでいたが、一昨年父親が亡くなった。母親は年金暮らしでお墓や納骨堂には手が届かず、しばらく遺骨を自宅で保管。「ここの霊園をネットで見つけ、母に教えて父の遺骨を納骨しました。母も昨年亡くなり、やはりここに納骨。周辺の眺めもいいし、両親に良い埋葬場所が見つかった」と話す。

札幌市清田区の女性（73）は2年前、自宅に長年保管していた夫の両親と娘、夫の計4体の遺骨を納骨した。2年前に亡くなった夫は転勤族で、両親のお墓や納骨堂も決められなかったという。息子は結婚しておらず、お墓を買っても継ぐ人がいない。この女性は「海での散骨よりも、土に戻る感じが良かった。息子とともにほっとしています」と安堵（あんど）した様子で語った。

道北のある市に住む男性（39）は最近、母親の家に十数年保管されていた祖父母の遺骨を納骨した。遺骨はもともとお寺の納骨堂にあったが、経済的な理由から母親が家に引き取っていた。この男性は「母がこの春に高齢者施設に移ったのを機に、ネットで探しました。お寺の納骨堂も考えましたが、経済的な事情で合祀墓を選びました」と説明する。

遺骨をいつまでに納骨、埋葬しなければならないという決まりはない。ただ、武田さんが札幌市や周辺などから受けた問い合わせや霊園での埋葬合わせて約2千件のうち、2割に当たる約400件は長期間自宅に遺骨を置いたままだった。武田さんは「一番多い理由は経済的に余裕がなくお墓を作れない例。次いでお墓の継承者がおらずお墓を作れないケースが多く、体調が思わしくなかったり入院中など身体的な理由もあります」と説明する。

正確な調査は行われていないため、全道や全国でどれほどの数の人が自宅に保管したままの遺骨で悩んでいるかははっきりしない。しかし、武田さんは相当数に達するとみて、「いずれは社会問題化するのではないか。遺骨の埋葬先に困っている人を少しでも減らしたい」と話している。（編集委員 福田淳一）